

第一七回丸山眞男文庫記念講演会

「個人」とは何か、「個性」とは何か
清朝中国と徳川日本で考える

渡 辺 浩

第一七回丸山眞男文庫記念講演会は、丸山眞男文庫顧問・東京大学名誉教授、渡辺浩先生にお願いし、二〇一七年一〇月七日に東京女子大学で開催された。会は大変盛況で、フロアからも多くの質問が寄せられた。本『報告』には、渡辺先生ご自身による講演要旨を掲載する。なお、本講演は杉並区教育委員会の後援を受けて行われた。関係者の方々に感謝申し上げる。

東京女子大学丸山眞男記念比較思想研究センター長 篠目清美

一、個性の個人主義と権利の個人主義

各人の生まれ持った「個性」を、それぞれに伸ばすことが望ましいという「個性の個人主義」は、各人はできる限り自分の判断で自分の人生を生きていく権利を有するという「権利の個人主義」の発展です。丸山眞男の論文「個人析出のさまざまなパターン…近代日本をケースとして」（一九六八年）は、後者を前提に、社会・国家を担い、支えていく個人の成立を展望したものです。興味深い作品ですが、「近代」以前はどこでも基本的と同様であるかのように想定されているのは疑問です。例えば、日本と中国の間でも大きな相違がありました。

二、宗族と個人…清朝中国

漢民族の宗族とは、厳密に父系でたどって先祖を同じくすると考えられた人々を一体として捉えたものです。各男性は、その中に確乎たる位置を占め、女性は嫁入ることによって夫と一体化します。

三、「家業国家」と個人…徳川日本

徳川日本社会を構成したいわゆるイエは、いわば「家業」を担う会社です。各人はイエにおける何らかの役割を分担することによって、生きていく位置を得ます。そして、その役割の名称として、名前があります。そこにおける驚くべき諸慣習と「個我」のありようは、「自分らしく生きたい」などと言う現代の我々には、なかなか想像しにくいものです。

四、明治以後

維新後、そのイエが徐々に崩壊しました。それに伴って「個人」意識や道徳観の変化が生じ、「煩悶」する「青年」も出現しました。



丸山眞男 YWCAにて(1949年)
『丸山眞男集』第4巻(岩波書店)所収

17th 丸山眞男文庫 記念講演会

申込不要・入場無料

「個人」とは何か、 「個性」とは何か 清朝中国と徳川日本で考える

講師：**渡辺 浩** 氏
(東京大学名誉教授・丸山眞男文庫顧問)

日時： 2017年**10月7日(土)**
15:00～16:30

会場： 東京女子大学24号館2階
24202教室

東京女子大学丸山眞男記念比較思想研究センター

〒167-8585 東京都杉並区善福寺2-6-1

☎ 03-5382-6817 ☎ 03-5382-6120

✉ marubun@lab.twcu.ac.jp

🌐 <http://office.twcu.ac.jp/univ/research/institute/maruyama-center/>

*事務取扱時間：月・水・木曜日(10:30～16:30) 8月休み

● JR 西荻窪駅北口より徒歩約12分

● 西荻窪駅北口または吉祥寺駅行きバス吉祥寺駅北口より西荻窪駅行きバス「東京女子大前」下車



概要

丸山眞男に「個人析出のさまざまなパターン：近代日本をケースとして」という論文があります（1968年）。地縁・血縁などの個別的なしがらみの中で生きてきた「前近代」の人々から、どのようにして「自律的に生きる個人」が出現するのか、いかにしてそれが可能なのかを探った作品です。その「個人」の像は、「そうさ 僕らは世界に一つだけの花」、「だから、私らしく生きたい」というような、個性を主張する個人とはやや違います。しかし、無論、関連しています。どう違って、どう関連しているのでしょうか。

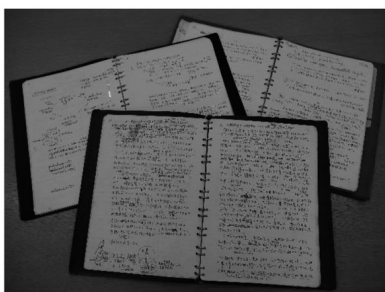
この講演は、この「個人」の出現や「個性」の主張について、まず「前近代」にさかのぼって、考えてみようというものです。「前近代」といっても多様です。例えば、徳川日本と清朝中国では、「個別的なしがらみ」のありようが、まったく違います。したがって、おそらく自我の意識も異なります。人の名前というものの意味も異なります。女性についても、男性についてもです。したがって、「個人析出」の「パターン」も異なるのではないかと、というのが、この講演の背後にある見通しです。

なお、「自律的な個人」の理想や、あらゆる人の「個性実現」の主張に疑問を抱き、さらには、にがにがしく思っている方もいるかもしれません。確かに、それらには問題もあると思います。しかし、賛否を議論するためにも、その前提となっている歴史の理解を深めることが必要ではないか、と思います。この講演がそのためにご参考になればと願っています。

講師プロフィール

1946年、横浜市生れ。1969年、東京大学法学部卒業。東京大学教授、法政大学教授（共に法学部）を経て、2017年4月より、丸山眞男文庫顧問。著書に、『日本政治思想史——十七～十九世紀』（東京大学出版会、2010年）、『近世日本社会と宋学 増補新装版』（同、2010年）、『東アジアの王権と思想 増補新装版』（同、2016年）などがある。

丸山眞男文庫



丸山自筆の講義ノート
（丸山文庫所蔵）

丸山眞男の思索の跡を伝える約2万冊の蔵書と約3万頁の草稿類が1998年に東京女子大学に寄贈されました。東京女子大学は、国際的な丸山眞男研究の拠点となり、貴重な資料がひろく活用されることを願って丸山眞男文庫を設立し、調査と整理を進めるとともに講演会、公開研究会、公開授業等を開催しています。

2012年4月より2017年3月まで、研究プロジェクト「20世紀日本における知識人と教養—丸山眞男文庫デジタルアーカイブの構築と活用—」（略称「丸山眞男研究プロジェクト」）を実施。2015年には、丸山宅での蔵書状況をウェブ上に再現した「丸山眞男文庫バーチャル書庫」（<http://maruyamabunko.twcu.ac.jp/shoko>）、丸山のノート・草稿類のウェブ閲覧を可能にした「丸山眞男文庫草稿類デジタルアーカイブ」（<http://maruyamabunko.twcu.ac.jp/archives>）を公開しました。

丸山眞男（1914-1996）

20世紀の日本が生んだ世界的な学者・思想家。父・幹治は戦前の代表的政論記者。その友人・長谷川如是閑の薫陶をうけて育ちました。日本学士院会員、ハーバード大学・プリンストン大学名誉博士、東京大学名誉教授。主著『日本政治思想史研究』『現代政治の思想と行動』は数ヶ国語に翻訳され、広く世界中に読者をもっています。『日本の思想』は岩波新書中でも超ロングセラーの一つです。

南原繁の勧めで日本政治思想史を専攻し、徳川時代における近代的思维的の形成を実証して、この学問分野の確立に資しました。また治安維持法による検挙・勾留や一兵卒としての兵営生活の経験などをふまえ、近代日本の天皇制的精神構造を内側から分析し、「抑圧移譲の原理」や「無責任の体系」の仕組みを解明しました。さらに福澤諭吉研究を通して明治維新がもつ今日の意義を明らかにし、自発的結社を核としました「市民社会」の形成や「精神的貴族主義」の必要を強調しました。永久革命としての民主主義の主張、また戦後の大衆社会状況下での人々の原子化と大衆民主主義の陥穽（画一化）の指摘はこれと裏腹の関係にあります。米ソ冷戦の最中に、政治的リアリズムの観点から日本国憲法第九条のもつ世界的意義を高唱し、国際秩序の再編を構想しました。